

Balaenoptera musculus

英名：Blue whale

和名：シロナガスクジラ

クジラうちあげられる

この発端は10月6日のシリコンバレー地方版(<http://www.chihouban.com/>)だった。San Mateo Countyの太平洋岸、Bean Hollow State Beach (http://www.parks.ca.gov/?page_id=527)に体長24メートル(80フィート)のシロナガスクジラが打ち上げられたという記事である。体重は推定75トン。ベイエリア周辺でシロナガスクジラが打ち上げられるのは実に30年ぶり。前回は1979年というからとても珍しい出来事である。初報では詳細は不明だったが、その後の調査からこのクジラはその1週間半ほど前に船と衝突したことが判明した。腰の辺りの骨が損傷していること、クジラとの衝突の報告がないことからクジラに衝突しても気づかないほど大型の船、おそらくタンカーのようなものに衝突し、死亡したクジラが流れてきたものと考えられる。

写真は、これは千載一遇とばかりにその週末10月10日にクジラ見物に出かけた時のものである。同じ考えの人が多らしく小さな駐車場は満員。普段はこの駐車場で十分なのだろうが、やむなく離れた位置に路上駐車をして砂浜をざくざくと歩く。前日までにTV画像を元にGoogle Mapで調べておいた通りの場所にその巨体は横たわっていた。さすがは地球史上最大の動物。死後二週間程度、また暖かい日が続いたこともあり、腐敗が進み周囲には独特の臭いが立ちこめる。満潮時にはほとんどは水面下になるが、干潮に向かう時刻を選んで行ったため体の大半は露出していた。仰向けになっている頭、すなわち顎のあたりに海水が溜まっているところに満潮時の名残が見て取れる。この日は波が高く、波に合わせて巨体が揺れる。肉のかたまりであることを実感する。中央部がくびれ、そこから内臓のようなものが露出している。これは胎盤(この場合はへその緒か?)である。あるいは内臓の一部も露出しているかもしれない。

6ヶ月の胎児

クジラの妊娠期間は約11ヶ月。事故にあったクジラは雌で妊娠中であつた。事故のためか胎児と胎盤が体から飛び出したため、腐敗が進んでいる。あるいは内部の腐敗でガスに押し出されたのかもしれない。ちぎれた内臓も一緒に漂っているが胎児にはしっかりと尾びれがあり、一見してそれとわかる。胎児は白く、風船のように波に漂っている。内部はガスで満ちているのであろう。おそらくやがては波に流されて母親とは遠く離れてしまうだろう。





一見人工物。しかし...

母クジラの体は船との衝突と、浜にうちあげられた衝撃とにより一部損壊している。ひときわ目を引いたのは砂浜に分散したなにやらエアコンのフィルターを思わせる黒い物体。似たようなものが5,6個見つかる。如何にも人工物らしき姿だが実はクジラの「ひげ」である。由来は口腔内の皮膚だという。組成はケラチンだから爪やサイの角などと同じである。触ってみると確かに堅い。解説員兼警備員(?)の話ではこのひげで濾し取ったオキアミやイワシを巨大な舌で舐めとって食べるのだという。その巨大な舌は腐敗して頭の上に伸びていた。シロナガスクジラは他のヒゲクジラと比べて大型の餌を食べるため比較して堅めで粗いヒゲだそう。打ち上げられた際に割れたのであろう頭骨の一部と椎骨の一部とおぼしき骨も本体から離れて露出していた。

Wikipediaによるとシロナガスクジラは3亜種に分けるのが現在の主流らしく、北太平洋のものはキタシロナガスクジラ *B. m. musculus* に分類される。他の2亜種はミナシロナガスクジラ *B. m. intermedia* とビッグミーシロナガスクジラ *B. m. brevicauda* でどちらも南半球に生息する。今はキタシロナガスクジラが北極海周辺から暖かい南へ下ってくる時期であり、おそらくメキシコ方面に南下している途中で事故にあったのだろう。

Ms. Blue

今回のクジラは今のところ引き取り手が無く、海岸にそのまま放置されることになっている。もし骨格標本にしたいと思うと、数年間の歳月と巨額の費用がかかるためである。最後の写真はサンタクルズにあるUniversity of California Santa CruzのSeymour Marine Discovery Center at Long Marine Laboratory (<http://www2.ucsc.edu/seymourcenter/index.html>)にあるシロナガスクジラの骨格標本。これが前回、1979年9月6日に打ち上げられたシロナガスクジラである。名前はMs. Blue。Bean Hollowからも近いFiddlers Coveに流れ着いた♀のシロナガスクジラである。体長は26.5メートル(87フィート)で今回のものより一回り大きい。骨格標本の作製は、肉の除去と骨の清掃が終わり組み立てに入ったのが1985年夏、完成が1986年末というから実に根気の要る作業である。放置される今回のクジラが骨になるまでには数ヶ月から1年程度かかるらしい。また、サンフランシスコのCalifornia Academy of Sciencesにも全身骨格標本があるが、こちらは雄、1908年にコレクションに加わったそうなのでかなり古い。

ちなみに日本でシロナガスクジラの全身骨格標本が見られるのは山口県下関市の市立しものせき水族館 海響館 (http://wandaba2.fuyu.gs/kaikyo/kaikyo_top.htm)のキタシロナガスクジラと東海大学海洋科学博物館 (http://www.umi.muse-tokai.jp/exhibit/perm/1995/m_science/ikimon00.html)のビッグミーシロナガスクジラだけだそうである。また、和歌山県太地町にある太地町立くじらの博物館 (<http://www.town.taiji.wakayama.jp/hakubutukan/index.html>)にはキタシロナガスクジラ全身骨格のレプリカがある。

今回は是非生きているのに海洋でお目にかかりたいものである。

